

入賞

私のおばあちゃん

岩出中学校 2年 二宮 里美

私がどうしてこのテーマを選んだかというと、今月、急に体調が悪化した私の祖母が亡くなってしまったことがあったからです。そのようなことがあって、私はこれから命はどのようなものなのかをよく考えながら生きていかないといけないと思いました。

事の発端は、私がまだ幼い時に体が悪くなり始めた祖母が施設に送られたことでした。その時はまだそこまでしんどそうにはしていなく、まだ私も何が起きているのか分からなかったためあまり気に留めていませんでした。しかし、時が経つにつれ、病状が悪化したのです。亡くなってしまう2週間前には、食べ物を食べた後、普通に食べ物が胃へと移動して消化するのが体の仕組みなのですが、祖母は消化する力がない状態でした。祖母は私の父の方の母だったので、父からその事を聞いた時はとてもびっくりしました。その週末に私たち家族は祖母のところへ行くことにしました。これで最期なんだと私は実感しました。当日、私たちが予定どおり祖母に会いに行くと祖母は寝たきりになっていました。年に2、3回くらいおみまいに行っていたのですが、この前会った時とは別人かと思うほど、やせていたのです。父は祖母の手をぎゅっと強く握っていたのをよく覚えています。どうか死なないでと伝えているように私は思いました。しかし、その思いは神様には届かなく1週間後、亡くなってしまいました。その日は、春休みが終わる2日前のことでした。私は、祖母との思い出は残念なことにあまりなくて、祖母の人柄や好みなどはほとんど分かりませんでした。でも、これまでに感じたことのない感情そして心に穴が空いたような気持ち、もっとこうしておいた方がよかったなという後悔など色々なことが私をおそったのです。次の日の夜にはお通夜が終わり、お葬式は2年生が始まった始業式の日でした。私は心から2年生になったと喜ばませんでした。そんなことより祖母が亡くなってしまったことに対する悲しい気持ちの方が強かったのです。学校を早退していつもの通学路で帰ったのですが不思議な

気持ちで家までの距離がとても長く感じたのを覚えています。葬式場に到着すると笑顔で

「久しぶり。せっかく新学期が始まったのにすまないねえ。」

と私の伯母が言ってくれました。私は無理をさせているような気がして上手に返事をすることが出来ませんでした。いつしか時間が経ち式が始まると先ほどまで明るそうな表情をしていた祖父、伯母、祖母の姉妹、そして私の父が涙をこらえることが出来なくなり、鼻をすする音が式場中に響き渡りました。すると、私もいろんな感情がこみ上げてきて涙が止まらなくなってしまいました。式が終わった後も悲しそうな祖父や伯母の表情を思い返すたびに、号泣してしまいました。

このようなことがあって、私は命は1つでもなくなると誰かは悲しむし、喜ぶ人は誰1人としていてはならないと思いました。時には長生きすることなく早くに亡くなってしまう人もいます。だけどずっと生き続ける人もいません。人間、誰も亡くなってしまうのです。だからこそ私は、命が尽きる前に、人との思い出作りはとても大切なのだと思います。人間いつかは亡くなるのだからどうでも良いと思う人はいるかもしれませんが、どうせ亡くなるのなら楽しい人生を送る方が私は幸せだと思います。お葬式やお通夜で見送る側も、見送られる側も幸せな気持ちで「さよなら」ではなく「ありがとう」という感謝の意を表せば、私は後悔なくお別れできると思います。